23　「発心集」鴨長明　─中世の仏教説話集

18年度　関西学院大学

★　次の文章は、家族に無断で出家してしまった年若い聖の伝記の一部である。これを読んで、後の問に答えよ。

　田舎には、この人を失ひて、父母妻子ども、みな肝心をまどはし、当国隣国いたらぬなく、足手を分かちつつ尋ね求むれど、いづくにかあるらん。「たとひ命尽きて空しきからとⓐなりたりとも、今一度そのかたちを見ん」と嘆き悲しむさま、ことわりにも過ぎたり。はてには、国の中①ゆすりみちて、見聞く人、涙を落とさぬはなかりけり。

　とかくいへど、かひなくて月日を送る間に、世の中に隠れなければ、ほどへて後なん、出家せしこと聞こえたりける。つひに、「野にこそ住むⓑなれ」と聞きて、泣く泣く消息しけり。「さしも浅からず思ひたりける道なれば、②そむかん事はいふにも及ばず、一つだにも書き置かずして、空しく親の心をまどはせる事なん、いとうらめしけれど、さていかがはせん。心をかへて思ふには、また、③罪さり所なきにしもあらず。この国にも山寺多かり。④近くてだに聞かまほしきを、かくして雲を隔てたるさかひにかけ離れたる事こそ、いと本意なく」など、さまざまに書きやれど、⑤さらになびくにもあらず。

　かねて父母なん、わざと京へ上りて、高野のに天野といふ所に詣でて、そこに呼びだして、対面したりける。その時、心の中⑥おろかならんや。若く盛りⓒなりしかたちは、見しものともなくやせ黒みて、ほろほろとある布小袖など、昔かりにだに見ざりし姿なれば、目もくれ、胸もふたがりて、とみに物言はれず。⑦とばかりためらひつつ、さまざま日ごろ思ひつめたる事ども、泣く泣く知らすれども、⑧はかばかしく物も言はず。ただ、「この山へまかり入りし時、また帰り出でじと思ひかため侍りしかど、いとまを申さずして家を出でて侍りし事の罪さりがたくて、また立ち戻り候ひつれども、⑨あらぬ心にて、かく出で侍るⓓなり。今より後は、たとひ御尋ね候ふとも、いささかもこれまで出づる事つかまつるまじ。されば、今はこればかりなん限りにて侍るべし。我を見まほしく思さば、心をおこして仏道を願ひ給へ。この世にては、たとひ思ふばかりそひ奉りたりとも、いつまでか見奉らん。我も人も後れ先立つ習ひ逃れがたければ、⑩せんなく侍るべし」と⑪つれなく答へて、帰り登りにけり。

　妻はそこまで登りけれど、面を向くべくも覚えざりければ、物のはざまより、わづかにのぞきて、忍びもあへずよよと泣きけり。父母、姿を見ざりし時よりも、なかなか悲しく覚えて、⑫泣く泣く帰り下りにけり。

　さて、国よりさまざま物ども沙汰し、のぼせたりける返事には、「これはいる事も⑬侍らねど、御ため滅ぶる縁とかならんと⑭思ひ給へて、念仏衆に⑮分け侍るべし。ただ、とくして浄土へ参らんと思ふ心のみ深く侍れば、日にそへて命のみこそいと悲しく侍れ。ゆめゆめかりそめの身を⑯いたはしくな思しそ」とぞ言ひける。まことに、着物、食ひ物のたぐひ、結衆に分かつのみにあらず、貧人見ゆれば、みな与へて、我がために残す事なし。

（注）＊高野…高野山。真言宗の総本山であり、修行の地であった。

＊罪滅ぶる縁…罪を消すきっかけ。僧への寄付は現世の罪深い行いを浄化する効果があると信じられていた。

問１　傍線部ⓐ～ⓓの「なり（なれ）」の文法的説明の組み合わせとして最も適当なものを次のイ～ヘから一つ選べ。

イ　ⓐ　形容動詞の一部　　ⓑ　断定の助動詞

　　ⓒ　断定の助動詞　　　ⓓ　推定の助動詞

ロ　ⓐ　形容動詞の一部　　ⓑ　伝聞の助動詞

　　ⓒ　形容動詞の一部　　ⓓ　断定の助動詞

ハ　ⓐ　動詞　　　　　　　ⓑ　伝聞の助動詞

　　ⓒ　伝聞の助動詞　　　ⓓ　断定の助動詞

ニ　ⓐ　動詞　　　　　　　ⓑ　伝聞の助動詞

　　ⓒ　形容動詞の一部　　ⓓ　断定の助動詞

ホ　ⓐ　動詞　　　　　　　ⓑ　断定の助動詞

　　ⓒ　形容動詞の一部　　ⓓ　伝聞の助動詞

へ　ⓐ　形容動詞の一部　　ⓑ　断定の助動詞

　　ⓒ　動詞　　　　　　　ⓓ　推定の助動詞

問２　傍線部①・⑦・⑧・⑪の意味として最も適当なものを次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選べ。

①　「ゆすりみちて」

　イ　途方に暮れて　　　ロ　飛び出して　　ハ　八つ当たりして

　ニ　ふさぎ込んで　　　ホ　大騒ぎして

⑦　「とばかり」

　イ　しばらく　　　　　ロ　互いに　　　　ハ　悲しみのあまり

　ニ　気まずそうに　　　ホ　不意に

⑧　「はかばかしく」

　イ　落ち着きがなく　　ロ　さりげなく　　ハ　ゆったりとして

　ニ　つらそうに　　　　ホ　はっきりと

⑪　「つれなく」

　イ　遠慮がちに　　　　ロ　悲しげに　　　ハ　無愛想に

　ニ　すらすらと　　　　ホ　せわしなく

問３　傍線部②「そむかん事はいふにも及ばず」の解釈として最も適当なものを次のイ～ヘから一つ選べ。

イ　子を思いやる親の意思に逆らうのは、言うまでもなく許しがたいことであるが

ロ　子を思いやる親の意思に逆らうのは、口で言うほど生易しいことではないが

ハ　俗世を捨てて仏門に入るのは、口出ししても仕方のないことであるが

ニ　俗世を捨てて仏門に入るのは、取りたてて言うほど立派なことではないが

ホ　仏の道に反するわがままな願いは、口に出すのもはばかられることであるが

ヘ　仏の道に反するわがままな願いであることは、言うまでもなく承知しているが

問４　傍線部③「罪さり所」とは何を表しているか、最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　仏の教えに背いて親子の絆を優先させる過ち

ロ　仏の教えに従って親子の絆を断ち切る必要性

ハ　仏の教えを守って清く正しく生きられる利点

ニ　親不孝者だというそしりを受けずに済む方法

ホ　親不孝者だというそしりを受けてしまう恐れ

問５　傍線部④「近くてだに聞かまほしきを」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　最近になって、あなたの様子だけでも聞くことができるようになったのに

ロ　最近のあなたの様子だけでも聞きたかったのに

ハ　せめて近くにいて、あなたの様子を聞きたいのに

ニ　せめて身近にいる間くらいは、私たちの願いを聞いてほしいのに

ホ　近くにいた時くらいは、私たちの願いを聞いてほしかったのに

問６　傍線部⑤「さらになびくにもあらず」とあるが、このようなそっけない態度を慣用句で表現するとしたら、次の空欄Ⅰにどのような語を補えばよいか。漢字一字で記せ。

取り付くⅠ　がない

［　　　］

問７　傍線部⑥「おろかならんや」を現代語訳せよ。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問８　傍線部⑨「あらぬ心」とあるが、これはどういうことを表しているか。その説明として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　修行に専念しようとする自分と、それを引き留めようとする親とでは、考え方が異なっているということ

ロ　俗世を捨てて高野山で修行に専念している自分は、いまさら親との再会を望んでいないということ

ハ　高野山で修行しようと決意したとき、自分はなけなしの勇気を振りしぼって山に登ったということ

ニ　出家をやめて親元に戻ろうかという思いが自分の頭に浮かんだのは、ただの気の迷いだったということ

ホ　親を見捨てて出家しようと決意したとき、自分はまったく冷静でいられなかったということ

問９　傍線部⑩「せんなく侍るべし」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　現世での別れを惜しんでも仕方がないでしょう。

ロ　ゆくゆくは来世で間違いなく再会できるはずです。

ハ　あれこれ迷わずに仏道に励まなければなりません。

ニ　極楽往生に関しては後れを取らないつもりです。

ホ　誰もが出家を望むのは言うまでもないでしょう。

◎問10　傍線部⑫「泣く泣く帰り下りにけり」とあるが、このときの父母の心情に当てはまるものを次のイ～へから二つ選べ。

イ　出家した息子から無常の世の道理を教えられたことで、いままで世の中の本当の姿に気づかずにいたことを痛感し、我が身が恨めしくなっている。

ロ　妻にあわせる顔がないと言って泣いた息子の姿を見ているうちに、家族を捨て去る側にも葛藤があるのだと気づき、痛ましく思っている。

ハ　いつまでも親の面倒を見る気はないと言い切った息子の姿に打ちのめされ、もはや息子は死んだものとしてあきらめようとしている。

ニ　かつては働き盛りだった息子のやせ衰えた姿を目の当たりにして、以前にもまして息子の身を案じずにはいられなくなっている。

ホ　自分の妻にも会おうとしない息子の姿を目の当たりにして、二人を結婚させたことを悔やみ、息子の妻に対して負い目を感じている。

ヘ　なまじ息子に会いに行ったせいで、二度と会いたくないという拒絶の言葉をじかに告げられる羽目になり、すっかり意気消沈している。

問11　傍線部⑬「侍らねど」、⑭「思ひ給へて」、⑮「分け侍るべし」の現代語訳の組み合わせとして最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

　　⑬　お側にはいないけれど

イ　⑭　存じますので

　　⑮　分けて差し上げよう

　　⑬　お側にはいないけれど

ロ　⑭　存じますので

　　⑮　分けてお与えになるべきだ

　　⑬　ありませんが

ハ　⑭　お考えになって

　　⑮　分けて差し上げるべきだ

　　⑬　ありませんが

ニ　⑭　お考えになって

　　⑮　分け与えるのがよいでしょう

　　⑬　ありませんが

ホ　⑭　存じますので

　　⑮　分け与えましょう

問12　傍線部⑯「いたはしくな思しそ」を現代語訳せよ。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

【解答】

問１　ニ

問２　①＝ホ　⑦＝イ　⑧＝ホ　⑪＝ハ

問３　ハ

問４　ニ

問５　ハ

問６　島

問７　普通でいられるだろうか、いや普通でいられるはずがない。

評価の基準　「並大抵ではない」という内容になっていれば可。可能はなくてよい。

問８　ロ

問９　イ

問10　ニ・ヘ

問11　ホ

問12　不憫だとお思いにならないように。

評価の基準　「禁止」になっていなければ全体０。

　　　　　　尊敬の訳出のないもの減点２。

　　　　　　「不憫だ」は「気の毒だ」「大切にしたい」も可。

【現代語訳】

　実家では、この人（＝聖）を失って、父母妻子たちは、皆途方に暮れ、その国や隣国など行かない所なく、手分けしながら捜し尋ねたけれど、どこにいるのだろうか。「たとえ命が尽きてむなしいになったとしても、もう一度その姿を見たい」と嘆き悲しむ様子は、無理もないことであった。しまいには、国中（の人）が大騒ぎして、（聖の失踪について）見聞きする人で、涙をこぼさない人はいなかった。

　あれこれ相談するが、どうしようもなくて月日を送る間に、世に広く知られているので、しばらく経って後、（聖が）出家したことが（噂で）聞こえてきた。ついに、「高野山に住むということだ」と聞いて、（父は聖に）泣きながら手紙を出した。「それほどまでに深く思い願った道だから、俗世を捨てて仏門に入るのは口出ししても仕方のないことであるが、手紙の一つさえも書き置かずに、無益にも親の心を乱したことは、とても恨めしいけれど、そう言ってもどうしようもない。立場を替えて（お前の立場で）考えると、また、（お前が親不孝の）罪をかぶらずに済む方法がないわけではない。こちらの国にも山寺が多くある。せめて近くにいて（あなたの様子を）聞きたいのに、こうして雲を隔てた（ような遠い）場所でかけ離れていることこそ、たいそう不本意で」など、さまざま書き送ったけれど、（聖は）まったく意志を翻すことがない。

　一方父母は、わざわざ都へ上って、高野山の麓にある天野という所に詣でて、そこに（聖を）呼び出して、対面したのだった。その時、（父母の）心の中は普通でいられるだろうか、いや普通でいられるはずがない。若く盛んだった容姿は、見ていた同じ人とも思えず痩せて黒ずんで、ぼろぼろになっている小袖の着物など、昔かりそめにさえ見たことのなかった姿なので、（涙で）目もくらみ、胸もいっぱいになって、すぐにはものも言えない。しばらく躊躇しつつ、さまざま日頃思い詰めていたことなどを、泣きながら伝えるけれども、（聖は）はっきりとはものも言わない。ただ、「この山へ参り入山しました時、また（ここを出て）帰るまいと決心しましたけれど、おいとまを申し上げずに家を出ましたことの罪を免れがたくて、また（今麓へ）立ち戻りましたけれど、（本心とは）違う心で、このように（山から）出てきたのです。これから後は、たとえお訪ねくださいましても、少しもここまで出ていくことはいたしますまい。だから、（会うのは）今回だけで最後でございましょう。私に会いたいとお思いなら、発心して仏道を願いなさいませ。この世では、たとえ思う存分そばにお控えしたとしても、いつまでお目にかかれようか、いや、いくらも一緒にはいられない。私もあなた方も生き死にが後先になるさだめは逃れ難いので、（別れを惜しんでも）仕方のないことでございましょう」と無愛想に答えて、（山を）登って帰ってしまった。

　（聖の）妻はそこまで登ったけれど、（聖が）振り向くはずもないと思われたので、物の隙間から、少し覗いて、我慢ができずよよと泣いた。父母は、（聖が失踪して）姿を見なかった時よりも、かえって悲しく感じて、泣き泣き（山を）下って帰ったのだった。

　そうして、（聖の）国（に戻った親）からさまざまな物を支度して、（山へ）届けたことへの返事には、「これは要ることはありませんが、（あなた方の）御ために罪を消すきっかけになるかもしれないと存じますので、念仏衆に分け与えましょう。ただ、早く浄土へ参ろうと思う心ばかり深うございますので、日増しに生きていることばかりがひどく悲しくてなりません。決してかりそめに（生きている）この身を不憫だとお思いにならないように」と言った。本当に、着物や、食べ物の類いを、修行者仲間に分けるだけではなく、貧しい人が目に入ると、全部与えて、自分のために残すことはないのだった。